アンケートによる1994年北海道東方沖地震における釧路市民の地震時の対応と防災意識に関する調査

山口大学　正員　○瀧本浩一
山口大学　正員　三浦房紀

1．はじめに

1994年10月4日午後10時23分に発生した北海道東方沖地震は根室市東方沖約20kmを震源とするM8.1の地震であった。この地震により根室、中標津を中心に被害が発生、さらに、道内だけではなく択捉など北方四島にも多大な人的・物的被害を出すものとなった[1]。この地域は今回の地震を経験する以前に、1993年1月15日に発生した釧路沖地震によっても被害を生じている。このように釧路市は被害を出すような大きな地震を2度続けて経験するという特別なケースにあったといえる。そこで、本研究は今回の地震発生後に釧路市民に対して簡単なアンケートを行い、釧路沖地震を経験をした釧路市民が1年半後に襲った北海道東方沖地震において地震時に何を考え、どのような行動をとったか、あるいは、前回の地震での経験が今回の地震にどのように影響を及ぼしたかを調査した結果を報告するものである。

2．アンケートの調査の概要

アンケートは地震発生から1週間後、釧路駅周辺の５０人に対して行った。調査方法としては個別に市民宅を訪れ、アンケート用紙を手渡し、回答を郵送してもらった。アンケートの回収率は４８％であった。なお、アンケートの主な内容は以下に示す通りである。

・地震発生した時、揺れている間、揺れがおさまってからそれぞれ何を考え、どのような行動をとったか
・日頃からの地震への備えについて
・1993年の釧路沖地震について

3．アンケート結果

（1）地震発生時について

地震により揺れ始めた時、回答者の２９％が家族の安全の事を考えたと一番多く回答している。次に揺れ始めた時、とっさにとった行動については、図-1に示すような結果を得た。これから食器棚を押さえるといった危険な行動をとった人が多かったことが分かる。この理由としては前回の釧路沖地震の家屋内被害の中で食器棚から食器類が落下した被害が多かったことから[2]、今回の地震でとっさに食器の落下を防ごうとした人が多かったものと考えられる。また、揺れている間、回答者の多くが「早く終われば良いと思った」や「家の倒壊」を考えており、多くの人が不安であったことが分かった。

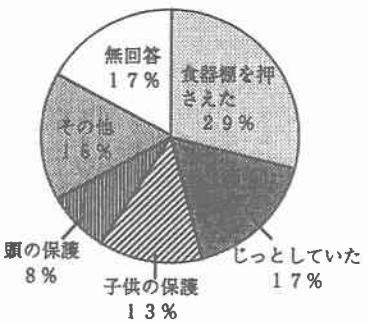

図-1　揺れ始めた時、何をしたか

（2）地震直後

地震による揺れがおさまった直後に何を考えたかという質問に対しては「建物・家財の心配」、「地震情報のキャッチ」がそれぞれ２５％を占めた。さらに、地震後とった行動としてはテレビ・ラジオをつけた人が全体の４２％と多く、これより市民が地震直後、地震に関する情報を入手しようとした

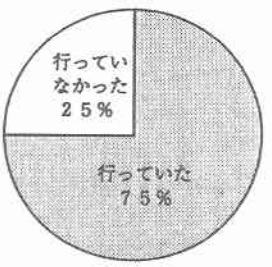

図-2　家具類を固定する等の地震対策は行っていたか

ことが分かる。

（3）日頃の地震への備え

今回の地震が発生する以前の市民の地震への備えについてみる。まず、避難場所をあらかじめ決めていた人は回答者のうち５０％の人が決めていた。さらに、図-２に示すように家具類の固定などの地震対策は約７割以上もの人が行っていたものの、非常用持ち出し品を用意していたかという問に対しては図-３に示すように回答者の３割の人しか用意しておらず、地震の備えについては備えがなされているものとなされていないものがあることが分かった。また、家族や友人などと防災について話をしたことがあるかという質問に対しては図４に示すように約７割の人が防災について話す機会を持っており、この結果から今回の地震発生前における市民の防災への関心が高かったことが分かる。

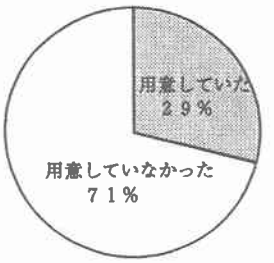

図-３　非常用持ち出し品を用意していたか

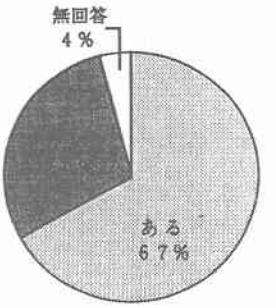

図-４　家族や友人などと防災について話をしたことがあるか

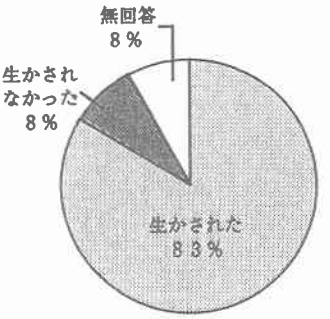

図-５　前回の釧路沖地震での教訓は生かされたか

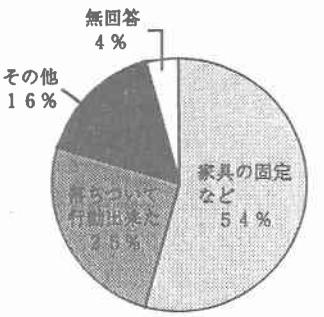

図-６　どのような点が生かされたか

（4）1993年釧路沖地震について

1993年の釧路沖地震における教訓が今回の北海道東方沖地震では生かされたかという質問に対しては図-５に示すように約８割の人が生かされたと回答している。その生かされた内容としては図-６のように家具類を固定したこと等をあげている人が多く、図-２における地震対策を行った人が多かったという結果に結びついている。なお、最後に今後も大きい地震が起きると思うかという質問に対しては５８％の人が起きると考え、ある程度、地震に対する危機意識を持っている人が多いことが分かった。

４．まとめ

本研究は北海道東方沖地震における釧路市民の地震時の行動や地震への備えを1993年の釧路沖地震との関係で検討を行ったものである。その結果、前年に発生した釧路沖地震から得られた教訓が生かされている部分と生かされなかった部分があることが分かった。即ち、アンケートに回答した人々の多くが、釧路沖地震での被害経験により防災への関心をよせ、家具類を固定したり、避難場所を決める等の備えを行っている。その一方で、前回の被害経験から被害を防ごうと地震発生時に食器棚を押さえるといった危険な行動をとった市民も多かった。これらのことから、被災経験者が被災後、防災に関する正しい知識を身につけずに再度地震に遭遇した場合、以前の地震経験により、かえって危険な行動をとることも考えられ、地震後に被災者に対して適切な防災教育や指導等のアフターケアを行うことが必要であり、そのための体制づくりや教育教材の充実が必要であると考える。

<<参考文献>>
1）濱田政則・磯山龍二・安藤知明他：平成６年北海道東方沖地震被害調査速報，1994. 11.
2）廣井　脩・伊藤和明・中村　功他：釧路沖地震における住民の対応，1993年度日本地震学会秋季大会講演予稿集，No.２，pp.116，1993.